

# チーム医療 支えに

## 迫る2025 シブク

2

### 7部 胃ろうの選択

それは10年ぶりに味わうお酒だった。

昨年4月1日、横浜市で在宅介護を受けていた大垣進さん(享年82)は、自宅から桜を眺めながら、ウイスキーをほんの少し口に含んだ。「おいしい?」。傍らで妻の佐智子さん(78)と歯科衛生士の佐藤由紀子さん(42)が笑顔で見守った。1カ月後、進さんは天国に旅立った。

口から食べるのが難しくなった進さんは、2009年7月、おなかに穴を開けチューブで栄養を入れる「胃ろう」にした。その後約3年半、自宅で生活した。

「胃ろうのおかげで、夫婦の時間を取り戻せて、本当に良かった」と佐智子さんは振り返る。そう言えるのは、こうした医療スタッ

フの温かいサポートがあったからだろう。

最初のうちは、口からも少し食べられた。佐藤さんは、色々なものを食べさせてくれた。ゼリーやヨーグルト、うなぎのたれ、手作りのシチュー……。後半は、口に含ませる程度だったが、「味やにおいで脳を刺激する」という効果を期待した。進さんののみ込み

機能の検査をした鶴見大歯学部  
の飯田良平助教(42)のアドバイスを受けた。

亡くなった後は、佐藤さんから、訪問の際の写真を貼ったアルバムをプレゼントされた。「たくさんの優しさや心の学び、楽しい時間をありがとうございました」などのコメントも添えられていた。

在宅医の赤羽重樹医師



大垣さんの自宅に集まる医療スタッフたち。医師や看護師、歯科医、歯科衛生士の連携の良さが、妻の佐智子さん(右端)を安心させた—横浜市、佐藤由紀子さん提供

(52)の存在も大きかった。胃ろうでトラブルが起きると、佐智子さんはすぐ電話した。一度こんなことがあった。昼過ぎに買い物に行くと、夕方帰ってくると、昼食用に入れたはずの栄養剤が、管が詰まったのか止まっていた。慌てて赤羽医師に電話すると「残りを入れば、夕食は抜いて大丈夫ですよ」。気持ちが落ち着いた。

「チーム大垣」は、スタッフ同士の連携もとれていた。11年1月、それを象徴する出来事があった。佐藤さんは、赤羽医師が胃ろうのチューブを交換すると聞き、「ぜひ見学させてほしい」と頼んだ。すると、ケアマネで看護師の大西美智子さん(56)や飯田さんも自宅に来る、と言い出した。

赤羽医師は胃ろう交換後、佐藤さんらスタッフ全員に、内視鏡で胃の中を見てもらった。一方、佐藤さんは、口腔ケアの様子を赤羽医師らに見てもらった。今、佐智子さんはいう。

「みなさん一緒にやっていると、すぐ安心してできました。一生懸命みてくれて、主人は本当に幸せでした」